

〈報告〉

ダンス教育の目標に関する研究 —高等学校のダンス担当教員の評価にもとづいて—

中村 恭子*・武井 正子*・浦井 孝夫**

A Study on the Aim of the Dance Education Which had Valued from Teachers of Dance in the High School

Kyoko NAKAMURA*, Masako TAKEI* and Takao URAI**

1. 緒 言

ダンス教育の目標はリズムカルな身体運動を通して身体能力や創造性・表現性・社会性を高め、個性を尊重しつつ豊かな人間性を育成することにある¹⁾²⁾。ダンスは「心と体を一体としてとらえる」運動そのものであり、新学習指導要領における体育科教育のねらいに大変適した運動領域であると考えられる。ダンス教育の目標に照らして、ふさわしい学習内容を提供することが必要である。

平成11年度の学習指導要領改定³⁾⁴⁾によりダンスでは従来の「創作ダンス」「フォークダンス」に加え、新たに「現代的なリズムのダンス」が導入され、これらから運動を選択して履修できるようになった。これにより学習内容が多様化した反面、偏った内容が提供されている学校もあることが先行研究⁵⁾の実態調査から明らかになった。多様なダンス種目それぞれの特性や学習のねらいを教員がどのように評価しているかが問題である。

そこで本研究は、各ダンス種目のダンス学習のねらいに対する教員の評価を明らかにし、ダンス教育の目標がどのように捉えられているかを分析することを目的とする。

2. 方 法

2.1 調査方法および対象

各ダンス種目のダンス学習のねらいに対する教員の評価について、意識調査により分析・検討した。調査は質問紙法・郵送法により実施した。対象は関東7都県の公立高等学校605校の保健体育科ダンス担当教員(ダンスの指導経験がある教員)各1名、計605名とした。回答数273名、回収率45.1%であった。そのうち有効回答数は261名であった。回答者の内訳は男性教員48名、平均44.4歳(±7.32)、女性教員192名、平均42.3歳(±9.43)、性別年齢不明が21名であった。調査期間は2002年11月8日～18日であった。

2.2 調査内容

「創作ダンス」「フォークダンス」および昨年度の実態調査において「現代的なリズムのダンス」としての実施率が高かった「ジャズダンス」「ヒップホップ」「エアロビックダンス」の計5種目について、ダンスの学習のねらいを5段階評定尺度により評価させた。ダンス学習のねらいは先行研究¹⁾²⁾⁵⁾⁶⁾⁸⁾にもとづいて検討し、「リズム感」の育成、動きの「技術」の習得、「表現力」の向上、「創作力」の向上、「鑑賞力」の向上、「感じあい」ながら動く、ダンスの特性の「理解」、「協調性」の育成、仲間との「交流」、「達成感」の体験、「楽しさ」の体験、「運動量」の確保の12項目を設

* 運動教育学研究室 Movement Education

** 体育科教育学研究室 Sport Pedagogy

定した。(以下、本稿では「 」内の用語で表記する)

各ダンス種目の各項目の平均得点を集計し、ダンス学習のねらいに対する教員の評価を検討した。また、各項目の種目間の得点差を Scheffe's F の多重比較検定を用いて検定し、有意差を検討した。

3. 結 果

3.1 各ダンス種目の平均得点

表1は各ダンス種目のダンス学習のねらいに対する評価の平均得点を示したものである。得点は評定尺度であるので、3が中立を示し、4は高く、5は非常に高く評価しているといえる。これから、各ダンス種目のダンス学習のねらいに対して教員が以下のように評価していることが明らかになった。

①創作ダンスでは創作力4.90、表現力4.85、達成感4.68、協調性4.67、鑑賞力4.64、感じあい4.62、交流4.52などが4.5以上の高い得点であり、これらを非常に高く評価している。また、理解4.22は4以上と高く、楽しさ3.89は4に近い得点で、やや高く評価している。一方、運動量3.06、

リズム感3.28は中立に近い得点であり、これらのねらいをあまり期待していない。

②フォークダンスでは交流4.43、楽しさ4.12、協調性4.00などが4以上で、これらを高く評価している。また、理解3.80をやや高く評価している。一方、創作力2.22は2に近く、学習のねらいとしていない。また、鑑賞力2.69、表現力2.79、達成感3.12、運動量3.20なども中立に近く、これらのねらいをあまり期待していない。

③ジャズダンスではリズム感4.54を4.5以上と非常に高く評価しているほか、楽しさ4.43、運動量4.38、技術4.19、達成感4.13、理解4.02を4以上と高く評価している。表現力3.98、鑑賞力3.82についても4に近く、やや高く評価している。

④ヒップホップではリズム感4.71、楽しさ4.61を4.5以上と非常に高く評価しているほか、運動量4.45、技術4.20、達成感4.12は4以上と高く評価している。また、理解3.86、交流3.84は4に近く、やや高く評価している。

⑤エアロビックダンスでは運動量4.90、リズム感4.66を4.5以上と非常に高く評価しているほか、楽しさ4.35を高く評価している。一方、感じあい2.81、協調性2.96、創作力2.99、鑑賞力

表1 各ダンス種目の学習のねらいに対する教員の評価得点

n=261

ね ら い	創作ダンス		フォークダンス		ジャズダンス		ヒップホップ		エアロビックダンス	
	Mean	S.D.	Mean	S.D.	Mean	S.D.	Mean	S.D.	Mean	S.D.
リ ズ ム	3.28	0.95	3.64	0.90	4.54	0.67	4.71	0.59	4.66	0.61
技 能	3.55	0.88	3.36	0.95	4.19	0.80	4.20	0.83	3.87	0.88
表 現 力	4.85	0.43	2.79	0.88	3.98	0.84	3.71	0.85	3.05	0.98
創 作 力	4.90	0.37	2.22	0.90	3.74	0.87	3.66	0.90	2.99	0.93
鑑 賞 力	4.64	0.61	2.69	1.04	3.82	0.88	3.71	0.93	3.04	1.02
理 解	4.22	0.85	3.80	0.88	4.02	0.76	3.86	0.83	3.61	0.97
感 じ 合 い	4.62	0.67	3.63	1.01	3.50	0.91	3.41	0.83	2.81	0.88
協 調 性	4.67	0.60	4.00	0.83	3.50	0.82	3.43	0.86	2.96	0.88
交 流	4.52	0.68	4.43	0.74	3.64	0.84	3.84	0.87	3.30	0.95
達 成 感	4.68	0.56	3.12	0.91	4.13	0.77	4.12	0.79	3.93	0.85
楽 し さ	3.89	0.98	4.12	0.89	4.43	0.65	4.61	0.59	4.35	0.75
運 動 量	3.06	0.90	3.20	0.95	4.38	0.69	4.45	0.70	4.90	0.33

3.04, 表現力3.05は中立に近く, これらのねらいはあまり期待していない。

3.2 各ダンス種目の平均得点の差の比較

表2は各ダンス学習のねらいに対する教員の評価について種目間の有意差を Scheffe's F の多重比較検定を用いて検定した結果である。各種目ごとに他の種目との同一項目の得点差を有意水準で表している。ただし, その種目の方が比較対象種目に対して有意に高い得点の場合は*で, 有意に低い得点の場合は-で表示している。主な傾向を以下にあげる。

①創作ダンスは表現力, 創作力, 鑑賞力, 感じあいの各項目が他の4種目全てに対して有意に高い得点であり, また, 協調性, 交流についても, フォークダンス以外の各種目に対して有意に高い得点であった。しかし, 運動量, リズム感については他の種目に対して有意に低い得点であった。

②フォークダンスは感じあい, 協調性, 交流がエアロビックダンスに対して有意に高い得点であった。しかし, それ以外の項目では各種目よりも有意に低い得点であることが多かった。

③ジャズダンスとヒップホップは運動量, リズム感が創作ダンス, フォークダンスに対して有意に高い得点であった。また, フォークダンスよりも技術, 表現力, 創作力, 鑑賞力, 達成感が有意に高い得点であった。

④エアロビックダンスは運動量, リズム感が創作ダンス, フォークダンスに対して有意に高い得点であった。一方, 表現力, 創作力, 鑑賞力において創作ダンスとジャズダンスより有意に低く, 感じあい, 協調性が創作ダンス, フォークダンスより有意に低い得点であった。

⑤理解についてはどの種目間においても有意差が認められなかった。また, 楽しさについては創

表2 各学習のねらいにおける種目間の有意差 (Scheffe's F の多重比較検定による)

種目	比較対象種目	リズム	技能	表現力	創作力	鑑賞力	理解	感じ合	協調性	交流	達成感	楽しさ	運動量
創作ダンス	フォークダンス			***	***	***		***			***		
	ジャズダンス	—		***	***	***		***	***	***			—
	ヒップホップ	—		***	***	***		***	***	*		—	—
	エアロビックダンス	—		***	***	***		***	***	***	**		—
フォークダンス	創作ダンス			—	—	—		—			—		
	ジャズダンス	—	—	—	—	—				***	—		—
	ヒップホップ	—	—	—	—	—					—		—
	エアロビックダンス	—						***	***	***	—		—
ジャズダンス	創作ダンス	***		—	—	—		—	—	—			***
	フォークダンス	***	***	***	***	***				—	***		***
	ヒップホップ												
	エアロビックダンス			***	**	***		*					
ヒップホップ	創作ダンス	***		—	—	—		—	—	—		**	***
	フォークダンス	***	***	***	***	***					***		***
	ジャズダンス												
	エアロビックダンス												
エアロビックダンス	創作ダンス	***		—	—	—		—	—		—		***
	フォークダンス	***			***			—	—		***		***
	ジャズダンス			—	—	—		—					
	ヒップホップ												

* p<0.05, ** p<0.01, *** p<0.001 ただし, 比較対象種目に対して有意に低い得点の場合は-で表示した

作ダンスよりヒップホップが有意に高い得点であるほかは有意差が認められなかった。

4. 考 察

以上の結果をもとに、各ダンス種目のダンス学習のねらいに対する教員の評価をダンス教育の目標に照らして分析すると以下のように考察された。

①創作ダンスは表したい感じを捉えて自由に表現し交流できるようにすること、グループでテーマを決め、作品を創作して発表・鑑賞しあうことができるようにすることが目標である¹⁾²⁾³⁾⁶⁾。教員は創作力、表現力、鑑賞力および感じあいなどのダンス学習のねらいを非常に高く評価していることから、創作ダンスの教育目標を的確に捉えているといえる。また、集団での作品創作学習を通じて達成感を体験させ、仲間との交流を深めるとともに協調性の育成にも有効であると評価している。しかし、他の種目に比較して運動量が少なく、リズムにのって踊ることを楽しむ³⁾というダンスの特性はあまり期待できないと捉えている。

②教員はフォークダンスを仲間との交流を深め、協調性を高めることをねらいとする種目であると評価しているが、そのほかの学習のねらいはあまり期待していない。フォークダンスの目標のひとつに、日本や外国の踊りの文化的背景や動きの特徴を理解すること、踊りを通して自国の文化や異国の文化の理解を深めることができるようにすることがある¹⁾²⁾³⁾。これは他の種目にはない重要な学習のねらいといえるが、教員は「理解」について3.80とやや高く評価しているものの、他の種目と有意差はなかった。これが文化の理解という教育目標に照らして評価した結果かどうかについては今回の調査では不明である。

③教員は現代的なリズムのダンスのうちジャズダンス、ヒップホップはリズムカルで運動量があり、動きの技術の向上をねらいとする種目であると評価している。また、表現力、創作力、鑑賞力の向上においてフォークダンスやエアロビックダンスよりも有効であり、楽しさや達成感を体験させることができると評価している。しかし、現代的なリズムのダンスの目標は、全身でリズムを捉

えて自由に踊ること、動きや相手との対応の仕方を工夫して交流すること、動きを工夫して発表しあうこととなっている²⁾³⁾⁸⁾。教員はリズムを捉えることや動きの工夫という目標は捉えているが、相手との対応、すなわち感じあいながら動くことをあまり目標としていないことが明らかになった。また、牛山は既存の技術にとらわれる必要はない⁸⁾と述べているが、教員は技術をねらいとして高く評価している。現代的なリズムのダンスは導入されて間もないことから、教員自身も運動経験や指導経験が少なく、その特性を動きの技術を中心に捉える傾向があり、自由な表現への指導の展開には至っていないと考えられる。

④エアロビックダンスは運動量が非常に豊富で、リズムカルな運動であると評価している。しかし、エアロビックダンスには創作力、表現力、鑑賞力、感性の向上などのダンス学習のねらいを期待していない。新学習指導要領⁴⁾⁵⁾では「体力の向上」や「生涯にわたって計画的に運動に親しむ資質や能力の育成」が重要なねらいとして掲げられており、「体づくり運動」を各運動領域においても関連を図って指導できるとしている。エアロビックダンスは健康・体力の維持増進を目的とした運動であり、各自の体力や目標に合わせて運動をプログラムし、リズムカルな音楽に合わせて楽しみながら継続的に実施することをねらいとした種目である⁷⁾。これらの関連によりダンス領域では、運動量を補い、生涯の健康教育につながる種目として期待されていると考えられる。

5. 結 論

教員の評価では、各ダンス種目の学習のねらいの重点はそれぞれの種目の特性によって異なっていた。ダンス種目の多様化とともに、ダンス教育の目標も多方面へ広がっているといえる。

現在、選択制や男女共修の導入により、生徒の個性やニーズに対応した学習内容が求められている。生徒の特性に応じて教育目標の重点は異なるであろうし、多様な個性に対応するためにはできるだけ多くの学習内容を提供する必要がある。限られた時間の中で何を目標とし、学習内容をバラ

ンスよく組み立てていくかを考慮しなければならない。それぞれのダンス教育の目標にふさわしい学習内容を検討し、望ましいダンスカリキュラムを提案していくことが今後の課題である。

文 献

- 1) 松本千代栄他 (1992) ダンスの教育学 大修館書店。
- 2) 松本富子 (1999) 表現運動・ダンスと学習指導。最新体育科教育法 杉山重利・園山和夫編著, 東京, 大修館書店, 120-125.
- 3) 文部科学省 (1999) 高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編 東京, 東山書房, 3-20, 57-63.
- 4) 文部省 (1999) 高等学校学習指導要領 東京, 大蔵省印刷局, 1-14, 96-103.
- 5) 中村恭子, 武井正子, 浦井孝夫 (2002) 高等学校におけるダンス授業のカリキュラムに関する研究。順天堂大学スポーツ健康科学研究 6, 94-105.
- 6) 高橋るみ子, 佐藤典子 (2001) 創作ダンスの授業。新学習指導要領による高等学校の体育の授業 東京, 大修館書店, 259-277.
- 7) 武井正子, 青木純一郎 (1983) エアロビック体操 東京, 大修館書店, 114-131.
- 8) 牛山真貴子, 薬師寺貴花 (2001) 現代的なリズムのダンスの授業。新学習指導要領による高等学校の体育の授業 東京, 大修館書店, 278-299.

(平成15年2月10日 受付)
(平成15年2月14日 受理)